

# 実習における F-SOAIAP（生活支援記録法）による 記録を通じた認識変化の一考察

山田 克宏

職業教育研究開発センター客員研究員  
秋田看護福祉大学看護福祉学部

## Study on the Cognitive through Recording by the Life Support Recording Method (F-SOAIP) during Practical Training

Yamada Katsuhiko

Vocational education center of research and development  
Akita University of Nursing and Welfare

**Abstract** : The purpose of this study was to clarify the changes in the students' perception regarding the training records on their pre-training education using F-SOAIP and the step-by-step learning in the training.

The subjects of the present survey were 12 students who had completed nursing care and social work training at a University A. Changes in the students' perception on the pre-and post-practice records were summarized as follows. There was a change in their perception that the students of Nursing Care TrainingII were able to understand the function of F-SOAIP, although they felt some difficulties in assessment. In addition, students in the social work training have realized the effect of visualizing the practical process despite that they felt the difficulty of F-SOAIP.

In conclusion, it can be inferred that the students were able to carry out step-by-step learning as to realize that F-SOAIP was an effective tool for promoting collaboration among multiple occupations.

The present questionnaire survey is few in case number, by which there is a limit in generalization. In the future, the research subject should be to explore the process of using the recording format properly to the learning proficiency such as descriptive formula, SOAP, and F-SOAIP.

**Key Words** : Evidence, Classification by item, Awareness, Step-by-step learning, Visualization

**抄録**：本研究では、F-SOAIP（生活支援記録法）を用いた学生の実習前教育、実習での段階的な学習による学生の実習記録に関する認識変化を明らかにすることを目的とした。

調査対象は、A大学で介護実習II、ソーシャルワーク実習を終えた学生12名である。実習前と実習後の記録に関する学生の認識変化をまとめた。結果、介護実習IIの学生は、アセスメントの難しさ感じていたものが、F-SOAIPの機能の理解が出来たという認識変化みられた。また、ソーシャルワーク実習の学生は、F-SOAIPの難しさを感じていたものが、実践過程の可視化していく効果を実感出来ている。

結論は、学生は、F-SOAIPが多職種間の連携の促進の効果的なツールであるという認識に至ったように段階的な学習が出来たことが推察できる。

今回のアンケート調査は、ケース数が少なく一般化することには限界がある。今後は、記録の形式を叙述式、SOAP、F-SOAIPと学習習熟度に応じて使い分けるプロセスを模索していくことが、研究課題と言える。

**キーワード**：根拠、項目による区分、気づき、段階的な学習、可視化

## 1. 緒言

介護保険制度が施行され措置制度から契約制度に移行し、20年が経過した。古都賢一は、「介護保険制度において5つ狙いがあるとしている。①自立支援、②在宅生活継続、③介護サービスの選択の保障、④家族の介護負担の軽減、⑤多様な主体の参入による雇用促進・介護サービスの質の向上、以上5つである」<sup>1)</sup>としている。また、2017(平成29)年に見直された「求められる介護福祉士像」<sup>2)</sup>は、項目が10となっている。その内「対象者の状態変化に対応できる」、「本人の望む生活を支えることができる」、「多職種協働によるチームケアを実践する」、「本人や家族、チームに対するコミュニケーションや、的確な記録・記述ができる」を含む8項目は、アセスメント、記録、チームケア、専門性が問われる内容となっている。そして、新しい介護福祉士養成カリキュラムにおいて「コミュニケーション技術」では、中項目「記録による情報の共有化」における内容として「介護記録の共有化」、「介護記録の活用」が挙げられている。つまり、介護記録の共有化、活用は、クライアントの尊厳、介護の質、介護福祉士の専門性を担保する上で重要となってくる。また、介護記録について小池は、「介護者が書くケース記録であり、個々の利用者とその介護について記録すること、また記録したものをいう」<sup>4)</sup>としている。そして、介護記録の目的を5つ示している。「利用者に介護したケアの記録、監査の資料、教育研究の資料、法的な保護、連絡調整の以上5つである」<sup>4)</sup>としている。つまり、介護記録は、どのような介護を行ったのか、ケアプラン・個別援助計画に沿ったケアを実施しているのか、多職種と共有化すべきクライアントの状態変化を記述する必要性がある。

次に、実習記録、介護記録を記述する困難性について先行研究の整理を行なう。

古市は、「介護記録に関する困難さについて記録に費やす時間が取れないこと、当該施設ではSOAPを使用しているがP(Plan)について記載が難しい状況からSOAまでの記載とし、カンファレンス等でPを検討していくことも必要」<sup>5)6)</sup>としている。宮本・楠永・吉賀らは、「初学習者にとっては、「記録を書く」ことそのものが困難な課題であることが多い」<sup>7)</sup>としている。川中・杉本らの介護記録の教育

効果の研究においては、「学生から根拠がわかると考察が出来るようになった、読み手を意識した実習記録を書けるようになった」<sup>8)</sup>というように「「ありのまま書く」、「根拠に基づいて書く」、「介護観、介護方法に対して意見交換を実習記録の添削を通して行う」という3ステップによる段階的学習」<sup>9)</sup>に関する学習効果、島田は、「新人職員の研修にF-SOAIIPを用いることで、上手く書けないという状態から自分の行なった行為や声かけを記載できた」<sup>10)</sup>という意見を紹介し、ツールの機能と意義を含めOJTとして学習効果があったことを示している。

先行研究では、記録を書く時間的制約、実習記録等を書くことの難しさ、段階的な学習により記述が向上していることが示されている。

さて、2010年の厚生労働省の「チーム医療に関する研究会報告書」<sup>11)</sup>では、「チーム医療を推進するための連携のあり方を提示し、医療スタッフ間の連携の在り方や連携の推進方策について提案」を行っている。IPEに関して直接的な言及は、ないものの「各医療スタッフの養成機関、職能団体、各種学会等においては、チーム医療の実現の前提となる各医療スタッフの知識・技術の向上、複数の職種の連携に関する教育・啓発の推進といった観点から、種々の取組が積極的に進められることを期待する」としている。

そのため、本研究では、介護福祉士に求められる能力、感性を培うことや多職種との連携に必要な客観的情報の把握が可能となるF-SOAIIP(生活支援記録法)を用い、学生の実習前教育、実習での段階的学習による学生の実習記録に関する認識変化を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

### (1) 記録法としてF-SOAIIPを使用した意味

小嶋・鳥末らは、F-SOAIIP(生活支援記録法「以下F-SOAIIP」)を用いるとFocus(着眼点)、Subjective Data(主観的情報)、Objective Data(客観的情報)、Assessment(アセスメント)、Intervention(介入)、Plan(計画)というように分類し記述することで、介入の根拠である着眼点を示すことが出来る」<sup>12)</sup>としている。また、小嶋・鳥末らは、「F-SOAIIPは、多職種間・多機関間の情報共有が容易となる」<sup>13)</sup>、「ドナルド・ショーンのリフレクションモデルをもとに、

生活支援記録法（F-SOAIAP）を開発してきており<sup>14)</sup>この記録法は、リフレクティブな観点を明示出来るもので、対人援助職の内省の程度、学習習熟度の状況を把握できると考えたからである。そのことは、ドナルド・ショーンが「直観的な驚きや喜び、希望や思いもかけないことへと導く時、私たちは行為の中で省察することによってそれに応える<sup>15)</sup>」としていることから妥当性があると言える。

## （2）調査対象、調査時期

### （a）調査対象

#### ① 実習前

介護実習Ⅱ担当学生 6 名、ソーシャルワーク実習担当学生 6 名

#### ② 実習後

介護実習Ⅱ担当学生 6 名、ソーシャルワーク実習担当学生 5 名（1 名がアンケート回答なしであった）。

### （b）調査時期

2021年 2 月～2021年 4 月

## （3）調査方法

介護実習Ⅱ・ソーシャルワーク実習の実習前・実習後の学生の記録に関する認識変化を明確にするため質問紙を使用し、直接記入方式で回答を得た。

具体的には、介護実習Ⅱに臨んだ者の内担当学生 6 名、ソーシャルワーク実習担当学生 6 名を対象に、自由記述も含め F-SOAIAP の記録法に関する認識変化を尋ねる質問紙調査を実施した。

### （a）手続きと倫理的配慮

本研究は、秋田看護福祉大学倫理委員会承認のもと（承認番号2020- 9）、調査協力者にあらかじめ、研究の目的・概要、協力は任意でいかなる不利益も受けないこと、個人情報保護の保護、調査目的と結果、統計的集計・分析し、研究の目的以外に使用しないこと、成績評価に影響しないことを説明し、了承を得た。

## （4）調査内容

### （a）介護実習前のアンケート項目

介護実習Ⅱに開始前の学生に行った質問紙の質問内容は、以下の通りである。

- ・今まで記録で苦労したことがあるか？
- ・F-SOAIAP についての難しさを書いてください（自由記述）。

F-SOAIAP による事前学習段階の学生の認識把握に関する 2 項目である。

### （b）介護実習Ⅱ実習後のアンケート項目

介護実習Ⅱ実習後に学生に行った質問紙の質問内容は、以下の通りである。

- ・F-SOAIAP に難しさを感じましたか？
- ・実習における記録の記入を通じて、F-SOAIAP に関する認識が変化しましたか？
- ・前述の質問に「はい」と答えた方は、その内容を書いてください。

以上の学生の認識変化に関する自由記述を含む 3 項目である。

### （c）ソーシャルワーク実習前アンケート項目

ソーシャルワーク実習前に行った質問紙の質問内容は、以下の通りである。

- ・F-SOAIAP について難しさを感じていますか？
- ・F-SOAIAP の難しさに関する自由記述内容

以上の学生の F-SOAIAP に関する認識把握のための 2 項目である。

### （d）ソーシャルワーク実習後のアンケート項目

ソーシャルワーク実習後に行った質問紙の質問内容は、以下の通りである。

- ・今まで、記録で苦労したことがありますか？
- ・F-SOAIAP に対する認識が変化しましたか？
- ・F-SOAIAP についての難しさに関する自由記述内容
- ・F-SOAIAP に関する認識の変化、考え方の自由記述内容

以上の学生の F-SOAIAP に関する認識変化に関する自由記述内容を含む 4 項目である。

## （5）分析方法

（a）評価指標には、難しさを感じている、多少、難しさを感じている、普通、あまり難しさを感じない、難しさを感じない以上 5 つの尺度を用いた。

（b）自由記述の項目については、項目ごとの考察を試みた。

（c）介護実習とソーシャルワーク実習の分析について介護実習とソーシャルワーク実習の分析は、実習

による比較ではなく、介護実習が実習2回目、ソーシャルワーク実習が概ね4回目の実習であること社会福祉養成科目の単位取得が進んでいる状況を踏まえ、学習習熟度に関する比較を行うこととした。

### (6) 用語の定義

専門職とは、「専門教育」(Professional Education)を受けた者で自己の業務を実行し、その仕事の成果や評価を記録して法的に保存することが求められている。したがって専門性の高い介護職は記録を残すことを義務づけられている。ケアすることが人間的発達の基盤となっていることもあるが、そのプロセスは決して平坦ではない。しかし、記録を書くことによってケアを振り返り、ケアの質を自ら問うことによって自分が行っていることの介護業務の意味や、やりがいを認識することができるわけで、そのことを通じて専門的判断を培っていく「濁点は、筆者が記述した」と定義した。

F-SOAIIP 記録とは、患者の問題を明確に捉え、その問題解決法のプロセスに沿って記録することであり、Sには患者の主訴、Oには他覚的所見、Aは判断または考察、Iには、支援または声掛け、Pには計画を記載し思考しながら問題の解決にあたる記録方法と定義した。

IPE (Interprofessional Education) は、専門職連携教育のことである。

具体的には、専門職間の協働やケアの質の向上のために、2つ以上の専門職が、共に、お互いから、お互いについて学びあう機会とした。

### 3. 結果

調査対象者は、12名である。

アンケート結果の回答件数は、介護実習前は、6件で、有効回答は、6件で有効回答率100%であった。介護実習Ⅱ実習後は、6件で、有効回答6件、有効回答率100%であった。また、ソーシャルワーク実習前は、6件で、有効回答数は、6件で有効回答率100%であった。ソーシャルワーク実習後は、6件で、有効回答は、5件で、有効回答率は83.0%であった。

アンケート結果を以下に記す。

1つ目として介護実習Ⅱ実習前の学生は、今まで

記録で苦勞したことがあるかと問いに対して、6名(100%)が「はい」という回答であった。

2つ目は、以下の自由記述である。

【介護実習前の学生がF-SOAIIPによる記録による難しさ】(介護実習Ⅱ実習前)表1

否定的な内容としては、対応をする場面が書きづらいというものであった。

肯定的な内容の主なものを4つあげる。

- ・利用者の間接的な言動から、ニーズ、気がかりを考察すること。
- ・アセスメントと介入の違いが分からず書くことが難しい。
- ・何がAで、何がIというような項目の区別が難しい。
- ・時系列で書くことに慣れているので、Iで対応したことが多くなると分からなくなる。

次に、介護実習Ⅱ実習後のアンケート結果を示す。

1つ目は、介護実習Ⅱ実習後の学生F-SOAIIPに難しさを感じましたかという質問したところ、あまり難しさを感じない2名(33%)で、どちらとも言えない1名(17%)で、難しさを感じている1名(17%)で、多少難しさを感じている2名(33%)という結果(図1)で難しさに関する認識は、どちらとも言えないという結果であった。

2つ目は、介護実習Ⅱ実習後にF-SOAIIPに関する認識が変化しましたかという問いには、「はい」6名(100%)と認識変化があったことを示している。

3つ目は、介護実習Ⅱ実習後の学生に対する自由記述の質問は、以下の通りである。

【実習における記録の記入を通じて、F-SOAIIPの認識の変化】(介護実習Ⅱ実習後)表2

否定的な内容としては、利用者の言動が見られない時は、書きづらいというものであった。

肯定的な内容として主なものを4つあげる。

- ・視点を分けて記述することで、情報の整理、考察が考えやすい。
- ・F-SOAIIPで記述しなくてもIの介入を見いだせるようになった。
- ・書き進めていくうちにその日の反省点がすぐに分かるようになった。
- ・慣れると自分の介入がどうであったのかを冷静に見ることが出来た。



次に、ソーシャルワーク実習の実習前・実習前後のアンケート結果を示す。

ソーシャルワーク実習前の学生へ F-SOIAIP について難しさを感じているかという問いへの回答は、多少難しさを感じている 3 名 (50.0%)、難しさを感じている 3 名 (50.0%) (図 2) と難しさを感じている傾向がみられた。

また、ソーシャルワーク実習後の学生は、「今まで、記録で苦労したことがありますか」という問い

に対して、「はい」 4 名 (80.0%)、「いいえ」 1 名 (20%) という結果 (図 3) であった。

学生は、記録で苦労してきた傾向あることが推察できる。

そして、ソーシャルワーク実習後の学生は、「F-SOIAIP に対する認識が変化したか」という問いに対して、「はい」 4 名 (80.0%)、「いいえ」 1 名 (20%) という結果 (図 4) で母数が少ないものの認識変化があったことを示している。

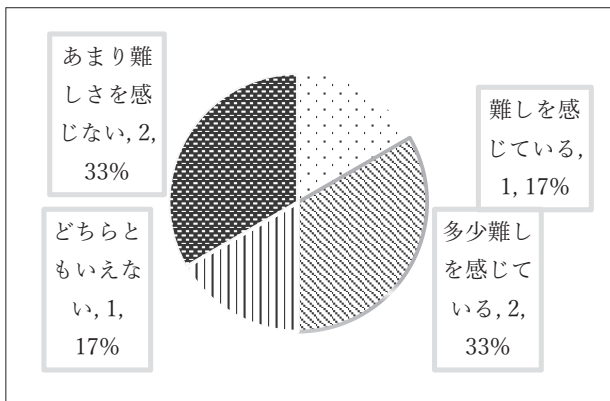


図 1. 介護実習 II 実習後 F-SOIAIP に難しさを感じましたか？

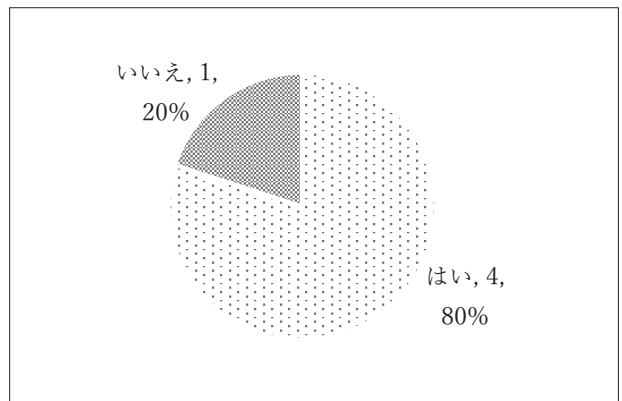


図 3. ソーシャルワーク実習後今まで、記録で苦労したことがありますか？

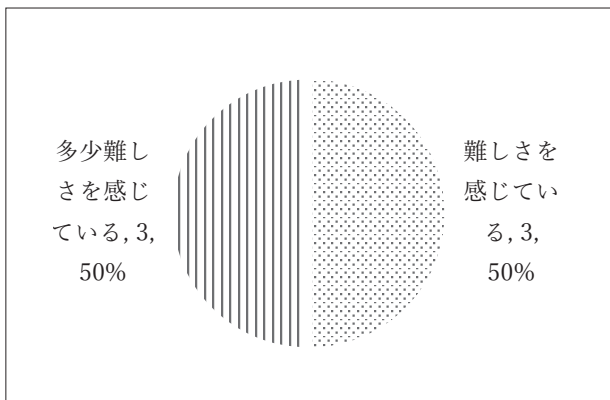


図 2. ソーシャルワーク実習前 F-SOIAIP について難しさを感じているか？

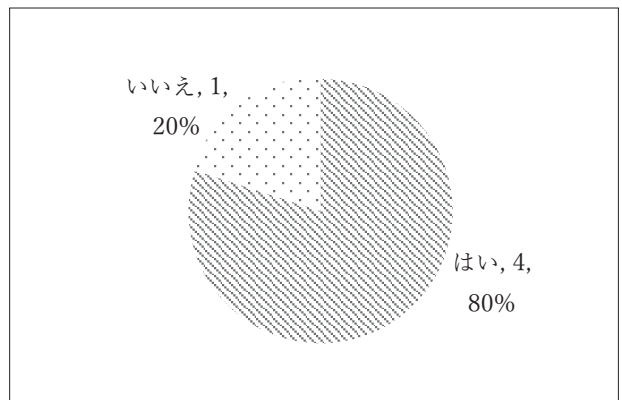


図 4. ソーシャルワーク実習後 F-SOIAIP に対する認識が変化したか？

表 1. 学生の F-SOIAIP に対する難しさに関する自由記述内容および考察 (介護実習 II 実習前)

否定的内容	考察
対応する場面が書きづらい。	学生は、記録を書くことを目的化している傾向がうかがえる。
肯定的内容	考察
利用者の間接的な言動から、ニーズや気がかりを考察すること。	学生は、アセスメントを行う難しさを感じている。
アセスメントと介入の違いが分からず書くことが難しい。	学生は、記録を書くことを目的化している傾向がうかがえる。
何が A で、何が I に入るかなど区別が難しい。	学生は、ツールを使用して書くことに囚われている。
時系列で書くことに慣れていたので、I で対応したことが多くあると分からなくなってしまう。	学生は、叙述式で書かないことに戸惑っている様子が、うかがえる。

さらに、ソーシャルワーク実習後の学生に対する自由記述内容の質問の2つの結果を示す。内容は、後述の通りである。

【F-SOAIP についての難しさ】ソーシャルワーク実習後（表3）

主な肯定的な内容の4つを示す。

- ・「何が」という根拠がはっきりしていて、見やすい。
- ・細かい気づきを得ることが出来る。
- ・実習記録を書きやすくなりそう。

- ・端的で分かりやすい。

【F-SOAIP に関する認識変化の気持ち、考え方】ソーシャルワーク実習後（表4）

否定的な内容が1つある。

途中で書き方が、分からなくなったというものであった。

肯定的な内容の主なもの4つを示す。

- ・F-SOAIP で書くことで、情報の整理をしやすと思う。

表2. 実習における記録の記入を通じた F-SOAIP の認識の変化 自由記述内容（介護実習II実習後）

否定的内容	考察
利用者の言動がみられない時は、書きづらい。	クライアントの言動で意思の把握が困難な場合は、非言語的コミュニケーション、表情から主観的情報を汲み取ることの認識が十分ではない。
肯定的内容	
視点を分けて記述することで、情報の整理、考察が考えやすい。	F-SOAIP のツール機能が理解出来ている。
F-SOAIP で記述しなくてもIの介入を見出せるようになった。	主観的情報・客観的情報からアセスメント、介入のプロセスに関する理解が深まっている様子がうかがえる。
書き進めていくうちに、その日の反省点がすぐに分かるようになった。	学生は、自己の反省点が分かってきており、アセスメント、介入、計画を記述出来ていることが推察できる。 学生は、気づきから支援に関する判断の妥当性についての内省（リフレクション）が出来ている。
慣れると自分の介入がどうだったのかを、冷静に見ることが出来た。	学生は、F-SOAIP による記録作成することで、行為や事象を項目ごとに考える思考が養われていることが推察できる。

表3. F-SOAIP についての難しさに関する自由記述内容（ソーシャルワーク実習後）

肯定的な内容	考察
「何が」という根拠がはっきりして見やすい。	F-SOAIP を使用する意味は、主観的情報、アセスメント、計画を項目ごとに書くことで、内省（リフレクション）出来ることにある。また、実践過程の可視化が出来ることは、ツールの意義への理解が深まっていることがうかがえる。
細かい気づきを得ることが出来る。	学生には、ツールの意味が伝わっている。
実習記録を書きやすくなりそう。	ツールの実践過程の可視化という機能の意味が伝わっている。
端的で分かりやすい。	学生は、記録を F-SOAIP で書く意義を理解している。 項目ごとに整理する意図が伝わっている。

表4. F-SOAIP に関する認識変化の気持ち、考え方の自由記述内容（ソーシャルワーク実習後）

否定的な内容	考察
途中で書き方が分からなくなった。	学生は、記録を正確に書くことを重視し過ぎている。
肯定的な内容	考察
情報の整理をしやすと思う。	学生は、項目ごとに記述することで、ツールの意義を理解出来ている。
記録がまとめやすかった。	学生は、記録の書きやすさを実感出来ている。
記録で考察しやすくなり、やる気が出た。	学生は、記録による段階的学習効果が得られていることが推察できる。
事例の要点を理解しやすかった。	学生は、項目ごとに書くことで実践過程を可視化出来る効果を実感している。

- ・記録がまとめやすかった。
- ・記録で考察がしやすくなり、やる気が出た。
- ・事例の要点を理解しやすかった。

以上のことから、どちらの実習でも認識変化あったと言える。

ただし、段階的学習の視点から捉えると、介護実習では、情報の整理がしやすい、項目ごとの区分が難しいから I（介入）が見出せるようになったというように、学習習熟度に関する具体的変化が生じたと言える。また、ソーシャルワーク実習では、F-SOAIAP に対して「難しい」というものから「記録がまとめやすい」というように学習習熟度に関して、学生の認識変化が生じたという結果であった。そして、具体的内容では、根拠、つまり、アセスメント、計画を導けるようになっていたことが推察できた。そのため、後述する考察のなかで、自由記述内容のそれぞれの分析について具体的に述べる。

#### 4. 考察

記録は、どのような介護を行なったかを記述をするもので、個別援助計画やケアプランに沿ったケアを実施されているのかを問われる。また、記録は、教育研究の資料とされているように、その介護実践が適切なのか、不適切なのか、課題があるのかということを検証、内省（リフレクション）する材料となる。そして、「連絡調整」、「監査の資料」という意味では、記録者だけに分かるのではなく、他の職員、上司、関係機関が読んで分かる記録である必要がある。

さて、F-SOAIAP は、クライアント状況を F（焦点）、S（主観的情報）等の項目ごとに分けて記録する方法である。つまり、利用者の状況、様子、表情、行動、対人援助職とのやりとりからどのようなことに

着目すべきなのか、クライアントの発言・思い、専門職の考え、観察内容、判断、支援内容、連絡したこと、今後の方針（計画）というように、目の前の事象やクライアントの訴えを捉え、考察し、介入・支援、計画を立てるための記録方法である。

看護記録で用いられる SOAP（図表1）には、介入や多職種との連絡調整の情報を記載する項目がない。

それに対して、F-SOAIAP の特徴は、支援内容に対して、根拠を記録することが可能という点である。また、叙述式での記録は、時系列で書かれており大きな違いがないように考えられている。ただし、F-SOAIAP は、項目ごとの記入をする過程で、意見や思考を振り返る過程であるリフレクションを経て記載することが求められる点に違いがある。

言い換えると、F-SOAIAP は、項目ごとに記載する中で、自己の支援行為を振り返り、「その場面におけるニーズ、気づき」、「アセスメント」、「介入」、「計画」を区分して書くことが求められる。

具体的には、申し送り情報を得て、焦点を定める場合、支援を行いながら主観的情報、客観的情報に基づき気づき得るという経過もある。そういう意味で、F-SOAIAP による記録は、事象をどのように捉え、解釈するのかという経過のなかで、自己の思考の枠組み、判断、解釈、対人援助職の対応、今後の方針の可視化が可能になるわけだ。記録を書くことは、目的ではなく、書く過程からどのように内省（リフレクション）、解釈、判断できるかということが問われていると言える。

社会福祉領域における支援では、正しい支援ではなく「適切な判断」、「今は、サービス提供を行わない」、「障害者手帳の申請の話をしなさい」、「一部介助とする」、「遠めの見守り」というような支援内容、

図表 1 2種類の項目形式の記録の比較

経過記録法	F-SOAIAP（生活支援記録法）	SOAP（問題指向型記録）
焦点	F（問題点にとらわれない、観察、アセスメントから支援者の専門職としての必要性を感じた点）	問題ごとに記録する
データ	S（Subjective Data）と O（Objective Data）を区別して記録	S（Subjective Data）と O（Objective Data）を区別して記録
アセスメント	A（Assessment）	A（Assessment）
介入・実施	I（Intervention） /（Implementation）	規程はない
計画	P（Plan）	P（Plan）
結果	S または O に記録	規程はない

出典：尾末憲子・小嶋章吾（2020）『医療・福祉の質が高まる生活支援記録法 [F-SOAIAP]』中央法規、p.15を筆者が加筆修正

介助量が増減の決定を行うことが求められる。また、支援者は、クライアント・家族の「障害受容」の程度、「予期悲嘆」の必要性、「老い」、「役割喪失」に関して支援が必要な状態であるかの判断も必要となる。

以上のことを踏まえ、介護実習・ソーシャルワーク実習のアンケート調査から学生の実習前・実習後の認識は、どのように変化が生じているかを分析する。

まず、介護実習Ⅱ実習前では、F-SOAIP に対する難しさでは、4点の特徴がみられた(表1)。

学生は、記録を書くことを目的化している傾向がある傾向があること、アセスメントを行う難しさを感じている、学生は、ツールを使用して書くことに囚われている、叙述式で書かないことに戸惑っている、以上4点である。つまり、この段階で学生は、実習が2回目である。そのため、学生は、記録を書くことに対する不安があり、記録の方法に着目し記録を書くことを目的化している。つまり、記録を書く意味、書く意義の理解までは、理解が進んでいないことが推察される。

次に、介護実習Ⅱの実習後では、否定的内容1点、肯定的な内容4点の合わせ5点の認識変化の特徴がみられた(表2)。

否定的な内容は、クライアントの言動での意思の確認が困難な場合は、非言語的コミュニケーションや表情から主観的情報を捉えることの認識が十分ではないという点である。

肯定的内容は、4つある。F-SOAIP のツール機能が理解出来ている、主観的情報・客観的情報からアセスメント、介入のプロセスに関する理解が深まっている、学生は、自己の反省点が分かかっており、アセスメント、介入、計画が記述出来ていることが推察できる、学生は、気づきから支援に関する判断の妥当性について内省(リフレクション)が出来ている、学生は、記録作成をすることで項目ごとに考える思考が養われていること、以上4点である。

一部の学生は、クライアントとのかかわり方が問われる結果となった。このことは、学生の F-SOAIP の難しさを感じるという実習後の結果に影響を与えていることが推察出来る。また、内省が出来る段階まで学習習熟度が高まれば、F-SOAIP で記入する記録法の良さを感じる事が出来る事が示唆され

る。つまり、F-SOAIP で記録を書けることは、クライアント理解にとって必要なことではある。

しかし、正確に書くということよりも、書くなかで、上手く書けないということを経験するなかで、教員がそのような学生の葛藤を支えることが重要と言える。教員は、学生が記録を書くなかで、支援行為や事象を整理出来る F-SOAIP による記録の意味を理解出来るような内容を教授すべきであろう。また、教員は、学生のそのように記録を書いていく過程を通じて、クライアントへの理解が深まることを強調し、内省(リフレクション)を促し、考えさせる必要性が示唆された。

結果として、学生は、書くことの目的化することから自由になれるということであろう。

記録は、書くことに意味があるのではなく、書くことで内省(リフレクション)を行い、支援過程を可視化していくなかで、クライアント理解が深まることに意味があることが示唆される。

次に、ソーシャルワーク実習後は、事前学習段階で難しいという回答であったとしても、F-SOAIP の記録法について肯定的である。その内容は、5点があげられる。

F-SOAIP を使用する意味は、主観的情報、アセスメント、計画という項目ごとに書くことで、内省(リフレクション)出来るようになること、実践過程の可視化出来るようになる、ツールへの意義の理解が深まっていることが推察出来ること、ツールの意味が伝わっていること、ツールの実践過程の可視化という機能の意味が伝わっていること、学生は、記録を F-SOAIP で書く意義が理解出来ていること、項目ごとに書く意図が伝わっていること、以上5点である。そして、学生の F-SOAIP で書く意義が分かる過程は、寫末・小嶋らが示している「老人保健施設かみつにおける多職種間の理解の促進、新人職員への教育効果が明らかになっている」<sup>14)</sup>とした状態と符合していることが推察出来る。なぜなら、学生は、記録を書くことに留まらず、書くことで気づきを得られるツールであるという認識が F-SOAIP による記録で得られたことから裏付けられると言える。

F-SOAIP に関する認識変化では、否定的な内容で1点、肯定的な内容(表4)の4点あげられる。

否定的な内容では、学生は、記録を正確に書くこ



とを重視し過ぎていることが推察出来る。また、肯定的内容で、学生は、項目ごとに書くことで、ツールの意義が理解出来ていること、記録の書きやすさを実感出来ていること、段階的な学習効果が得られていること、学生は、項目ごとに書くことで実践過程が可視化されていく効果を実感していること、以上4点である。

介護実習Ⅱの学生は、実習2回目で、ソーシャルワーク実習の学生は、概ね4回目の実習で実習回数から捉えれば、ソーシャルワーク実習の学生の方が学習習熟度が進んでいることが推察出来る。学生の回答からも、介護実習Ⅱの学生は、アセスメントが難しさを感じていたものが、ツールを活用するなかで、ツールとしての機能を理解出来たという認識変化があった。

それに対して、ソーシャルワーク実習の学生は、F-SOAIAPの難しさを感じていたものが、実践過程の可視化される効果を実感するという認識変化がみられた。また、学生は、F-SOAIAPを作成、活用する意義である事例検討にそのまま利用可能という点まで理解が進んだことが示唆される。そういう意味では、実習回数を重ねてきていることや学習段階が進んでいる実習であるという意味で、段階的学習によって記録法の機能や意義というレベルまで、理解出来てきていることが推察出来る。

## 5. 結論

アンケート調査からは、介護実習Ⅱでは、F-SOAIAPで書くことが目的化されている状況から、記録を通じ主観的情報・客観的情報からアセスメント、介入を明示するというプロセスに関する理解出来ており、段階的な学習に繋がっていることが推察出来る。また、ソーシャルワーク実習では、F-SOAIAPの記入に難しさを感じていても、項目ごとに記述することで、実践過程の可視化に繋がっていくことを理解出来ている。

このような複眼的な理解を可能にしているのは、ソーシャルワーク実習が学生によっては、4回目の実習であることが影響していることが推察できる。また、記録を書くことの意義を認識出来てきていることが示唆された。さらに、学生は、F-SOAIAPが多職種間の理解の促進、効果的なツールであるという

認識に至りつつあるように、段階的学習が出来たことが推察できる。

今回のアンケート調査は、ケース数が少なく一般化することには限界がある。今後は、記録の書き方について、事前学習・実習中・事後学習、介護実習・ソーシャルワーク実習・精神保健福祉援助実習という1回の実習の一連の学習過程、各種実習を連関的捉える必要がある。また、段階的学習に関するループリック評価表を作成していくことで、記録を書くことを目的化すること、ツールとして使用することに囚われることを未然に防止できる可能性がある。そのため、記録の形式を叙述式、SOAP、F-SOAIAPと学習習熟度に応じて使い分けるプロセスを模索していくことが、研究課題と言える。

## 引用文献

- 1) 日本社会保障法学会 (2004)『社会保障法』NO19、法律文化社、p. 12。
- 2) 公益財団法人介護福祉士会「求められる介護福祉士像」<https://www.jaccw.or.jp/about/fukushishi/image> (2021. 8. 31アクセス)
- 3) 鳥末憲子・小嶋章吾 (2020)『医療・福祉の質が高まる生活支援記録法 [F-SOAIAP]』中央法規、pp. 16-19。
- 4) 小池妙子 (2017)「介護記録の理解と記述力向上のポイント」『介護福祉』夏季号、NO106、公益社団法人社会福祉試験・振興センター、p. 11。
- 5) 古市孝義 (2016)「特別養護老人ホームにおける介護の質の向上へ向けた介護記録の在り方」『大妻女子大学人間関係学部紀要』NO18、p. 56。
- 6) 前掲5)、p. 57。
- 7) 宮本佳子・楠永敏恵・古賀成子・重松義成・柗崎京子 (2017)「初学習者における「介護実習記録」を課題とするループリック評価の試作と活用」『帝京科学大学紀要』Vol13、p. 78。
- 8) 川中康子・杉本詠二 (2015)「介護実習記録における教育効果の一試行～学生の学習意欲の向上と科目間の連携の取り組み～」『松山東雲短期大学研究論集』Vol45、p. 46。
- 9) 前掲8)、p. 39。
- 10) 島田朋子 (2019)「F-SOAIAP：生活支援記録法の導入&実践効果」『介護人材』Vol16、No 2、pp. 74-75。
- 11) 厚生労働省 (2010)「チーム医療の推進について (チーム医療の推進に関する検討会報告書)」<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/dl/s0319-9a.pdf> (2021. 8. 31アクセス)
- 12) 小嶋章吾・鳥末憲子 (2019)「多機関・多職種連携を促進する生活支援記録法 (F-SOAIAP) の活用と教授法」ケアマネジメントスキルアップ資料、p. 15。
- 13) 前掲11)、p. 19。

- 14) 寫末憲子・小嶋章吾（2019）「多職種の実践過程を可視化する人材育成の提案」『地域ケアリング』Vol21、NO 6、p. 83。

佐藤学訳『専門家の知恵』ゆみる出版、p. 91。

受付日：2021年11月 8 日

- 15) Donald Schon (1983) THE Reflective Practitioner =2001